芸豪烈伝その16

松平洋子（まつだいらようこ）

「浪曲はお客さまに感動を与えないと」

写真・森　幸一ほか　文・おさだ権助

まつだいら　ようこ　本名・川野みち子。東京都は本所出身。母が二代・松平八千代。10歳、松平美千代として初舞台。「私の場合、母親が看板でして修行の苦労はありませんでした」。趣味は音楽と読書。「私は遅咲きの大器晩成です」。歌手としても実績がある。いまはビクター専属。新曲は5月に安珍・清姫を描いた『情炎　日高川』。

高く澄んだ声。的確に情感豊かに演じ分けられる登場人物。人生の真実を衝き、それでいて容易に理解できるテーマ。

松平洋子の舞台は奥行きと広がりと「豊かな静かさ」がある。芸豪と呼ぶに値する数少ない大看板のひとりだ。

東京は池袋の自宅に師を訪ねた。

「舞台で演じるといっても空気を売っているようなものですからね。浪曲は感動しかありません。お客様には感動をお持ちかえりいただきたいんです」

感動を与えたい、は表現活動を行なう人間すべての願望だが、その多くの人々は果たせない。

松平洋子の浪曲に聞きほれていると、瞬間、物語の世界がくっきりと目の前に現れることがある。芸の力だ。

「芸とは、むずかしいもので私もいまだにわかりません。ただ登場人物になりきって、台本で読んだ感じたものを伝えたいと思っているんです」

声はだいぶ鍛えたのですか。

「ノドには気を使っていますが、声は自然に高い声が出るんですよ」

浪曲の将来は。

「若いファンの獲得が急務でしょう。それには、わかりやすい演題をすることです。三十代以上は、まだまだ浪曲の良さがわかりますよ」

浪曲界の若手へのアドバイスを。

「歌舞伎を見てほしい。私は母に連れられて子供の時分から見ています。お芝居のこと、三味線のこと、いろいろ勉強になるんです」

好きな言葉は。

「ありがとうという感謝の言葉です。自分は生きているんじゃなくて、生かされているんです。社会に感謝、大自

然に感謝しています」

洋子師は自宅にご亭主の御影若佐（みかげ・わかさ）と二人住まいだ。

御影若佐師は現役の浪曲師でもあるが、本業は洋子師のマネージャーだ。洋子師が21歳で若佐師と結婚、それ以来40年以上、二人三脚で浪曲界を駆け抜けてきた。

「私は芸に対して欲がないので、博視（ひろし）。若佐師の本名）さんにしごかれました。博視さんは親に勘当されるほどの芸好きで節キチなんです」

それでは若佐師に登場をねがわずばなるまい。

若「二人で夜どおし芸の話をして、東の空がしらじら明けてきたなんて数えきれないほどありますよ」

洋「芸のことでは、よくケンカをします。主人には、いまでもドナラレます。罵詈雑言（ばりぞうごん）の嵐です。『節が単純だ』『悲しい場面は明るい節が効果的だ』とか。

今度の外題は文句をいわせないぞと稽古に入っても、やはり主人が一枚うわてで、説得されてしまうんですよ」

二人の間には子供が二人いて、むろん成人している。孫は二人で今日はお孫さんがひとり遊びにきている。洋子師が、その5歳の孫をいたわる様子は『二十四の瞳』の大石先生のようだ。

洋「私は、芸については主人のアドバイスで動くロボットですよ」

若「彼女は女房でなくタレントだと思っています。実際、味噌代やガス代がいくらか知らないでしょう。

神様には、彼女に天性の美声を与えてくれたことを感謝していますよ」

洋「芸のために、もうすこし叩かれようかと思う反面　また芸の話かと、うんざりすることもありますよ。ほほほ」

松平洋子という肥沃な大地に若佐師が種を蒔き収穫された果実が『おしん』や『父ちゃんのポーが聞こえる』、『呂昇物語』などの、かずかずの名作なのだ。

それにしても若佐師の芸に対しての執念はすさまじい。

若「人間は徹底的に怒らせると性格がわかるんです。明るい面と暗い面がありますね。浪曲の台本を選ぶときは、性格とは反対の作品がいいんです。性格の暗いひとは明るい作品を演じるといいんですよ」

昭和46年頃の写真。「父は私が2歳のときに他界しました。遺言で私は浪曲師にするなと。でもまあ、自然とこの道に入っていましたね」

妻は気品、慎ましさ、潔さが備わり、もののあわれを知る。夫は猪突猛進の疲れをしらないブル・ファイター型。理想の夫婦だ。

若「いまは芸が不況なんです。芸人が勉強しないからです。本を読まない。新聞にも目を通さない。時代の流れがわからない。それで舞台に立ってはいけないんです」

若「浪曲台本はきちんとした起承転結がないといけない」

若「お客さんも甘くなった。昔はもっとヤジが飛んだものだが」……

と若佐師の舌鋒はとどまるところを知らず、「このまま夜どおし芸の話では東の空がしらじら明けてくる」と判断した根性なしの当方は退散することにした。

夫唱婦随。浪曲ネタだと、ちょっと違うが『仙台の鬼夫婦（女大学）』を連想した。おふたりの芸道一筋の苛烈な生き方がスゴイ。

いやはや、感嘆の一夜でした。

浪曲…これほどすばらしい芸は他にはないと思います。

浪曲家の皆さん…頑張って下さい。

多くのファンを楽しませて下さい。

16/52

葛飾区・坂本豊吉